

定過程やその影響・反応にも着目し議論するようになった。また政治や経済分野にも関心が広がり、それと同時に、文化的統治と知識権力の関係といった問題についても注目が集まり、ポストコロニアリズムの立場から帝国主義やその植民ディスコースを批判するようになった。²³

二つ目は、台湾島史という解釈から、植民地主義に対する複雑な反応や変化のプロセスを新たに論ずるようになった点である。かつての「日本 vs. 台湾」という二項対立による解釈構造とは対照的に、地方社会の多様性や連続性をより重視する研究者も現れた。人々の関係性を見る研究においては、家族史料や個人の日記など、民間史料の発掘や整理が進み、台湾社会史のケーススタディのための研究史料も広がりを見せた。また、漢人社会中心だった過去の研究を見直し、台湾原住民やエスニシティに関する研究も重視され始めた。空間を扱った研究では、台湾島を北部・中部・南部・東部に分け、それぞれの地域における差異を強調するだけでなく、台湾人の海外経験、特に華南・満洲・南洋地域での活動にも注目するようになった。国の枠を超えた歴史的視座から、台湾とその他の植民地の歴史経験を比較する研究も行われている。²⁴

結論

アメリカの中国史家 Paul Cohen は、戦後の中国研究を振り返った著作の中で、1970 年代末以降、研究成果の蓄積や批判意識の高まりにより、研究者の視角は中国中心史観に向かい、戦後の諸々の「西洋の衝撃」論や近代化論・帝国主義論といった主要モデルが西洋中心主義に基づくものだったと批判している。また 1980 年代の中国研究を振り返った際、彼は中国中心史観が中国近代史研究に貢献したことを肯定しつつも、比較史や東アジア地域ネットワーク・少数民族史・海外移民史といった新しいテーマを考えるにあたっては、中国中心史観は研究視角として限界があると述べている。²⁵台湾とアメリカの学術発展のプロセスは決して同じではないが、Cohen のこのような評価は、1980 年代以降勃興した台湾中心史観の歴史研究の状況にも同様にあてはまるのは間違いない。

近年のグローバル化理論の趨勢の中で、台湾を国際的な学術討論の場に取り上げるには東アジアを視野に入れる必要がある。東アジアの儒学・漢文からトランスナショナルなカルチュラル・スタディーズにいたるまで、異なる分野の台湾研究者が台湾という島を飛び出し、活動範囲や視野を外に広げている。²⁶

23 Michael Shi-Yung Liu. *Prescribing Colonization: the Role of Medical Practice and Policy in Japan-Ruled Taiwan* (Ann Arbor, Michigan: AAS, 2009); 曾文亮「全新的舊慣——日治時期總督府法院對臺灣人家族習慣之改造」『台湾史研究』第 17 卷第 1 期、2010 年、125～174 頁。

24 許雪姬編『日記與臺灣史研究（上）（下）』（台北：中央研究院臺灣史研究所、2008 年）；許雪姬「日治時期臺灣人的海外活動——在「滿洲」的台灣醫生」『臺灣史研究』第 11 卷第 2 期、2004 年、1～75 頁。

25 Paul Cohen. "Revisiting Discovering History in China." *China Unbound: Evolving Perspectives on the Chinese Past* (New York: Routledge Curzon, 2003), pp. 185-199.

26 王宏仁、郭佩宜主編『流轉跨界——跨國的台灣、台灣的跨國』（台北：中央研究院人文社會科學中心

ただ、国際関係や地縁政治という現実の中で、いわゆる東アジアはあくまで中国・日本・韓国という三国が主体となっており、民族国家の有形無形の境界線はいまだ消すことも超えることもできていないという点は留意しておかなければならない。台湾史の新しい研究は、日本や韓国の主流学界からいまだ充分には関心を寄せられておらず重視されてもいない。²⁷台湾史研究者は、積極的に国外に共同研究や比較研究の機会を求めると同時に、日治時期の台湾史や台湾史料の重要性をアピールし、その他の学問領域（たとえば日本帝国史や比較植民地研究）との有機的な関連を確立すべきである。また、自民族中心主義や文化特殊主義、ひいては地域偏狭主義といった盲点や限界に陥ることを回避し、現代に生きる台湾近代史研究者として重要な学術課題を担っていかなければならない。とはいえ、台湾の研究者が、日本帝国における地域文化を明らかにするとともに、帝国の周辺にある異なる地域や人々の被植民者の歴史や主体的経験に注意を向け始めたことは、誠に喜ばしいことである。ポストコロニアルとトランスナショナルを兼ね備えた新しい研究動向は、未来の東アジアの学界に相互理解と対話の場をつくってくれることであろう！²⁸

亞太區域研究專題中心、2009年）。

27 陳姪媛「以台灣觀點審視東亞殖民地史研究的過去與未來」『中央研究院週報』第154期、2008年2月。

28 柳書琴編『戰爭與分界——「總力戰」下台灣、韓國的主體重塑與文化政治』（台北：聯經、2011年）。